



Veritas No.17(2002.1.28)

目次 (敬称略)

<図書館とのつきあいかた>	正木(勝谷)芳子
<パソコン嫌いのあなたへの手紙>	櫻木幸子
<元気な梨花の学生達>	井原麗奈
<オルチン文庫にある「讚美歌集」について>	茂洋
<その一>	

無断転載を禁ず

<図書館とのつきあいかた>

正木(勝谷)芳子 英文学科専任講師

神戸女学院に通い始めたのは中学1年生の時、1977年のことでした。中・高・大の10年間、そして、教員になって12年間通い続けたこのキャンパスの中でもずいぶんお世話になったのは、図書室と図書館でした。

大学に入学したてのころ、図書館本館に入って、その重厚でアカデミックな雰囲気や圧倒されると共に、「大学に入ったんだなあ」と感じた覚えがあります。でも、並んでいる本がどれもこれも難しそうで、中高の時には毎日通い詰めていた図書室とは随分雰囲気が違い、足が遠のいていたのも事実です。それが、大学2年の時に明るくてオープンな新館ができ、再度、図書館が私にとって大切な場所となりました。自由閲覧室で友人たちと調べものや試験勉強をしたのもいい思い出です。また、一人になりたいときにまず行くのも、図書館でした。新館で本になれてくると、本館の雰囲気もまた好ましいものと感じるようになりました。目についた本をばらばらと開いてみたり、ただ、本のにおいに囲まれて書架の間を歩き回ったり、そういう時間が私にとってはとても落ち着くひとときでした。

最近では、本の電子化が進み、授業中に見かける辞書も電子辞書がほとんどとなってきました。私自身、OEDのCD-ROM化、MLAのオンライン化などには、諸手を挙げて賛成し、便利になったと喜んではいますが、その便利さの一方で、本と出会う楽しみが減っているような気がします。

情報を手に入れようとするときには、ピンポイント的に、この本、この論文、という探し方をすることももちろんよくあります。そのときには、オンラインでの検索が非常に便利ですし、電子化されたものだと得た情報をコンピュータ上で管理・加工するのも便利です。書き写すうちに間違ってしまう、ということもなくなります。また、ある意味では世界中から情報を得るということも可能になります。でも、図書館がそれだけの場になってしまうというのは寂しいなあと思うのです。

辞書を引いても、電子辞書だと、引きたいと思う単語だけが出てくるわけですが、印刷された辞書だと、単語を引く過程で別の単語に出会うという楽しみがあります。本や論文についても同じことが言えると思います。ある本を探して書架を見ているうちに会った本の方が、最終的には最初に探していた本より重要だったりすることも私にはよくありました。

4月からは教壇に立つことはなくなりますが、今度は同窓生として、また図書館にはお世話になることになると思います。「自分の専門」に縛られることなく、いろいろな本と出会えることを楽しみにしています。

<パソコン嫌いのあなたへの手紙>

櫻木幸子 文学部リサーチルーム

社会の流れに少し遅れをとりつつではあるが、神戸女学院大学でもIT化が進んでいる。「外からの圧力が大きいため無意識のうちにうまく波に乗った人」と「第一波が過ぎてしまい、やや諦め気味の人」に分かれているようである。諦めてしまう理由には、LAN設定がわからない、おかしくなった時の対処方法がわからないなど技術的なものと、必要性を感じないという根本的なものに分かれる。

10年ほど前は、パソコン好き（いわゆるオタク）だけがパソコンを使っていたのだが、電話が電子メールに、DMがホームページに、提出書類はWordデータで、図書検索はデータベースで、とパソコンが日々の生活にどんどん入り込んできて、パソコン嫌いであると損をしているような気がしてしまう時代になった。

個人的には、パソコンはひとつの道具だから使えない人がいるのは当然だと思っているが、各社努力した結果、テレビやビデオや洗濯機ぐらいの難しさになってハードルは随分低くなったといえるだろう。プリンタの設置からソフトのインストールまで何でも業者がやってくれる。インターネット接続は自分で設定しなくてはならないが、マニュアルに従えばよいし、最悪わかってそうな人に聞けばいい。

ならば。パソコン使ってみませんか？(これが今回の本題である)
手始めはインターネットに接続して美味しいお店でも探してみる。それから懐かしい友からの年賀状に...@...jpと書いてあれば、メールを送ってみる。そんな所から始めると何だか楽しそうじゃないですか？本屋に行けば、マニュアル本がいくらでも売っているから、とりあえず1冊手に入れて始めよう。

パソコンを使わない人から良く聞くセリフ「壊しそうで怖くて...」大丈夫、壊れたかなと思っ

たら業者に見てもらえばいい。それでもだめなら新しいのを買えばいい。(最近テレビより安い)車と同じで1台目は壊すつもりでかかればいい。と思えば案外壊れない。パソコンなんてそんなものだ、命にかかわる事はない。(爆発はしないはず)

まず一歩。始めてみないと自分に向いているかどうか分からないのだから。

<元気な梨花の学生達>

井原麗奈 総合文化学科3年生

皆様こんにちは、昨年の二月から韓国の梨花女子大学校に留学しております、井原麗奈と申します。今回このようにして、私の経験を皆様にお伝えできる機会を与えていただき、感謝いたします。

さて、韓国といえば、今年の6月に行われるワールドカップの共同開催地ですよ。最近日本でも韓国に興味を持つ人が多くなってきたように思います。しかし、隣の国だとはいえ、皆様韓国についてまだまだ知らない事が多いのではないのでしょうか？ このニュースレターで少しでも多くの方に、韓国のことを深く知っていただけたら幸いです。

ではまず、韓国の女子大生について紹介いたします。私が留学している梨花女子大学校は韓国随一のお嬢様学校だと呼ばれています。日本で売られている観光客向けのガイドブックにもそう書いてあります。私も実際、留学する前から色々な人にそう聞きました。

女学院も一応お嬢様学校だと言われておりますので(?!), 同じ感じなのかと思ってこちらに来てみましたが、学内の雰囲気や、出会う学生の姿は随分違いますね。

こちらでは朝からグラウンドでドンドン・カンカン大きな音を出しながら、チャング(韓国の太鼓)の練習をしています。昼間は学校前にある「梨花橋」という橋の取り壊しに対して、スピーカーで叫びながら反対運動をしていますし、夜は夜で10時を過ぎてもたくさんの学生がおり、駐車場で野外映画上映会をしていたり、外にステージを作って花火をあげながら家政科の学生達がファッション・ショーをしていたりもします。5時を過ぎたら女学院はカラスしかいませんものね。

なにせ一日中活気に溢れていて、静まる事を知らないといった感じが致します。あまりのうるささに岡田山の静けさが懐かしくなった事もありました。しかし、やはり活発な学生を見るのは

気持ちの良いもので、その姿に何度となく励まされ、何事にも意欲的なれたような気がします。

そんな中で、良い友人にもたくさん出会いました。みんな凄いですよ。彼女たちとの会話をちょっとここで再現してみますね。一緒に驚いてください。

学祭：留学生の仲間達と



* 法学部Aさん：「賭博で捕まった時ってさあ・・・。」

私：「えっ、何の話？」

Aさん：「あー、司法試験の話。」

(やばい話かと思った。)

* 史学科Bさん：「TOEICは800点以上無いと話にならないんだよ。」

(確か満点は990点だったはず。ねえ、ちょっと待ってよ。)

* 私：「専攻は何だっけ？」

舞踊科Cさん：「バレエです。」

(韓国の大学には舞踊科があるのは当たり前。この他現代舞踊科、韓国舞踊科も有り。)

* 国文科Dさん：「あのさあ、『わたしと小鳥と・・・』それからあとなんだっけ？」

(もしかして、金子みすず？何で知っているの？)

* 音楽学部Eさん：「今度学校でカヤグン（韓国のお琴）の演奏会あるの。聞きに来てよ。」

(そういう彼女の専攻は国楽。)

この他にも作曲専攻とか、コンピューターデザイン専攻の学生にも会いました。彼女たちとの会話を見てもおわかりの通り、ここ梨花女子大学には本当にたくさんの学部、学科があります。「梨花で学べないものはないのでは？」とってしまうくらい、殆ど全ての学部（韓国語だと「大

学」になります。)を網羅しています。

普通の大学にもよくある人文科学学部、自然科学学部や生活環境学部はもちろんのこと、女子大では珍しく、法学部、工学部、医学部までもあります。

学校はソウル市内の中心に位置するにも関わらず、このすべてが一つの敷地の中にあるため、キャンパスはとても広いです。お陰でこちらに来て直ぐの頃は、毎日まよっていたものです。こちらの学校の様子、少しは味わっていただけましたでしょうか？次回は学内にあります図書館の様子についてお伝えしたいと思います。ここの図書館、24時間開いているのですよ。どうぞご期待ください。

梨花女子大講堂



<オルチン文庫にある「讚美歌集」について その一>

茂洋 本学名誉教授

下にある「各教派別讚美歌集の流れ」は、オルチン文庫にある「讚美歌集」を歴史順に、そして教派別に記したものです。

左端の「組合教会」とは、神戸女学院も属していた教派で、Congregational Church です。その最初の宣教師は、神戸で伝道を始めたグリーンでした。

次の右の「一致教会」は、その後「日本基督教会」となった、長老派 Presbyterian Church のことで、あの有名なヘボンが最初の宣教師として、横浜で教会を設立しました。

「メソジスト・改革派」は、長崎と横浜で、「バプテスト教会」は、横浜でそれぞれ伝道を始めました。

ごらんになってお分かりのように、どこの町も港町ですね。宣教師たちは皆、船で日本のそれぞれの港に入って活動を始めたのです。

もう一つ不思議に思われませんか。最初の讃美歌集はどれも、明治 7 年（1874）に出版されているでしょう。その理由は、日本開国の歴史と関係しているのです。ご存知のように、徳川慶喜が徳川幕府を解体したのが 1867 年（慶応 3 年）のことです。同じ年に、兵庫が開港されました。王政復古し、明治天皇の即位が翌 1868 年で、ここから明治の時代のはじまりとなりました。翌 1869 年（明治 2 年）首都が京都から東京（江戸）に移り、江戸城が皇居となりました。政局は不安定で、キリスト教（カトリックも含めて）への弾圧は根強く、「キリスト教邪宗門の定」の高札が日本各地に掲げられていました。しかし諸外国の日本政府への圧力は強く、特に「信仰の自由」が、日米交渉の条約改正条件に加えられ、明治 6 年（1873）ついに「切支丹禁制」の高札が撤廃されたのです。そこで、それぞれの港町で活動していたキリスト教の各教派が「讃美歌集」を発行したために、明治 7 年に揃って出版されたのです。

今回は、それぞれの教派がどのように協力して、「新撰讃美歌」を作っていたか説明しましょう。

各教派別の讃美歌集の流れ

